

下川原遺跡発掘調査 現地説明会資料

と き 平成 17 年 12 月 10 日

ところ 発掘調査現地

遺跡名称 下川原遺跡 (しもがわら いせき)
所在地 甲賀市水口町泉字下川原 地先
調査期間 平成 17 年 8 月～12 月中旬(予定)
調査面積 5,700 m² (区 3,200 m²、区 2,500 m²)
調査主体 甲賀市教育委員会
調査実施会社 株式会社大林組・国際航業株式会社

【遺跡の概要】

本遺跡は、昨年末に大規模ホームセンターの開発が計画され、「岩かまえ古墳」に隣接していることから、今年 1 月に試掘調査を実施、計画地の一部が遺跡であることが確認されたため、発掘調査を実施しています。

遺跡の周辺には、平成 15 年度に滋賀県教育委員会が発掘し、大型倉庫 3 棟が見つかり、大和政権との関係が指摘されている「植遺跡」からも南東に約 1.6km と近く、古墳時代中期の「西籬子塚」(総長 60m の造出付円墳)・「東籬子塚」(直径 42m の円墳)や野洲川の中・上流域で唯一甲冑が出土している「泉塚越古墳 1 号墳」(一辺 60m の方墳)が所在しています。

また、野洲川を隔てた対岸の山腹には、6 世紀後半～7 世紀前半の古墳群と推測されている「園養山古墳群」(128 基以上)が築造され、このあたり一帯が 5～7 世紀の野洲川中・上流域の中心であったことが考えられます。

【発掘調査の成果】

調査地では 6 世紀中頃～10 世紀の溝や竪穴住居 47 棟、掘立柱建物 9 棟が確認されました。

この遺跡の特徴として建物の規模や方位が一定でなく、遺構の重複があることや出土遺物の時期が 6 世紀中頃～10 世紀にわたることなどを合わせて考えると 3 時期以上の集落の変遷が考えられ、出土遺物の相対的な量の比較から古墳時代後期から飛鳥時代(6 世紀後半から 7 世紀後半)を中心とした集落と考えられます。

また、周辺の調査事例の比較から、「植遺跡」(5 世紀中頃～7 世紀前半)に後続する集落と考えられます。

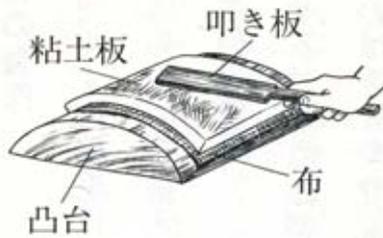
竪穴住居跡の覆土から 7 世紀の土器に共伴して 2 点の平瓦が出土しています。

瓦の製作技法が「桶巻き作り」であることから、7 世紀後半から 8 世紀前半までに作られたと考えられ、これまで甲賀市内では確認されていなかった白鳳期の寺院や奈良時代の役所などの施設が周辺に存在する可能性が考

えられるようになりました。

遺構は、 区の東半から 区全体に広がっています。

また、遺跡の所在する地形を検討すると、野洲川が形成した河岸段丘の最も低い段丘に位置し、北東から南西方向に傾斜する緩斜面であることや周辺の遺跡の分布状況から、更に遺跡は東側に広がっている可能性も考えられるようになりました。

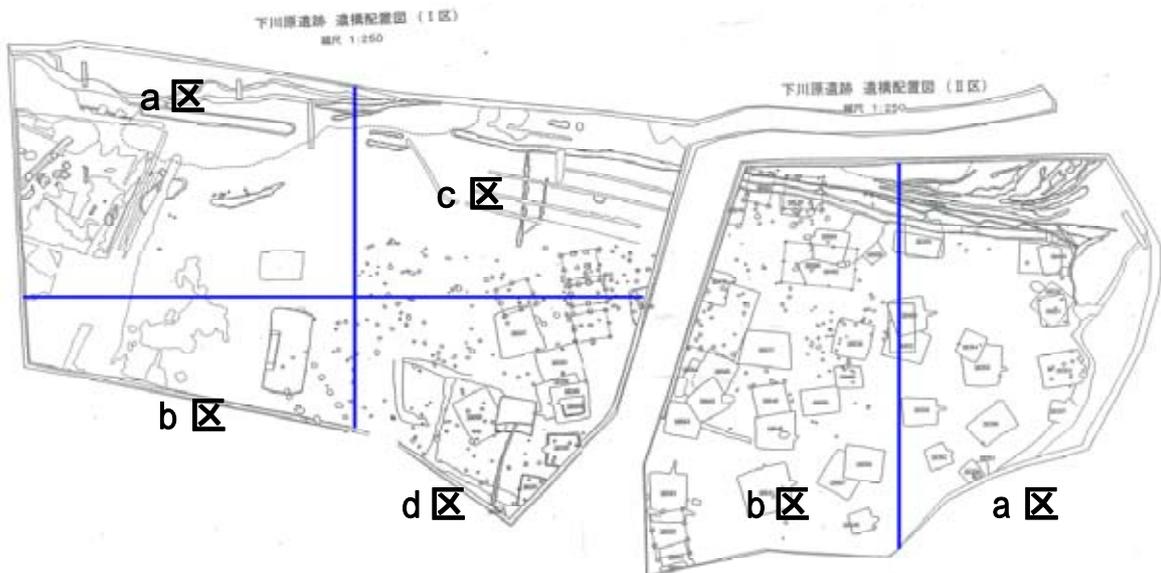


左 一枚作り

右 桶巻き作り

桶巻き作りの方が一度にたくさんできるように見えるが、大きな粘土の塊が必要になるなど取り扱いが難しく作業効率が悪いため、8世紀前半には大量生産に向けた一枚作りに技法が変化する。

(図は潮見浩著『技術の考古学』から)



調査地 地区名称(縮尺 1/500)

【遺構の概要】

竪穴住居跡 … 区で 10 棟、 区で 37 棟が見つっています。その他に区中央で、住居跡の掘形は見つからなかったものの焼土が 2 箇所で見つっていることから少なくとも 50 棟以上が作られていた事が考えられます。

建物規模は、床面積が判明する 35 棟の平均が 20 m²弱ですが、 区の建物 1(SB541)の 6.1m×5.8m が最も大きく、他に床面積が 30 m²を超えるものとして建物 2(SB287)があります。逆に小さな建物としては建物 3(SB350)の 2.3m×2.2m が最も小さく、床面積が 10 m²に満たないものが 6 棟建てられています。

また、平面形態が長方形プランのものも 5 棟みられ、一般の住居とは違う用途に使われていたのかもしれませんが。(建物 4(SB500)・建物 5(SB358)・建物 6(SB537)・建物 7(SB543)・建物 8(SB555))

掘立柱建物跡 … 区で 4 棟、 区で 5 棟が見つっています。

区で見つかった建物 A(SB700)・建物 B(SB701)・建物 C(SB702)・建物 D(SB703) は、いずれも建物規模が 4.2m×3.5m(建物 B は 3.8m)とほぼ同じ大きさです。

この建物は、方形に近い平面形態を採ることや建物 C 以外は総柱建物であることを考えると倉庫として使われていたことも考えられます。

また、柱掘形の重複状況から建物 B の後に建物 C が建てられていること。

建物 B と D はほぼ柱列を揃えて建てられていることや 1 棟分の間隔が開けて建っていることからこの 2 棟は同時期の建物である可能性があります。

区で見つかった建物 E(SB402)・建物 F(SB61)・建物 G(SB704)・建物 H(SB405)・建物 I(SB550)は、建物の方位が東に傾く建物(建物 E・F・G)と西に傾く建物(建物 H・I)に大別できます。

前者では、他の建物の 2 倍以上の大きさがある建物 E(8.9m×5.1m)を中核として、その北側にほぼ同じ規模の建物 F と G が付属することが考えられます。

それに対して後者は、 区で見つかった建物の方位や柱間寸法に共通点が見られ、 区の建物との関連が推測できます。

遺構略称	遺構番号	建物規模				柱間寸法		方位
	種別 番号	桁行	梁行	桁行	梁行	桁行寸法	梁行寸法	
建物A	SB 700	2 間	2 間	4.20	3.50	2.10	1.75	N 17 W
建物B	SB 701	3 間	2 間	4.20	3.85	1.40	1.93	N 8 W
建物C	SB 702	2 間	2 間	4.20	3.50	2.10	1.75	N 6 W
建物D	SB 703	3 間	2 間	4.20	3.50	1.40	1.75	N 7 W
建物E	SB 402	3 間	2 間	9.00	5.10	3.00	2.55	N 7 E
建物F	SB 61	2 間	2 間	(3.00)	3.90	(1.50)	1.95	N 12 E
建物G	SB 704	3 間	2 間	4.50	3.90	1.50	1.95	N 5 E
建物H	SB 405	1 間	1 間	2.80	2.45	2.80	2.45	N 7 W
建物	SB 550	3 間	2 間	5.25	3.85	1.75	1.93	N 8 W

掘立柱建物の規模一覧

【まとめ】

現在も調査中であるため、個々の遺構の年代や下川原遺跡の集落変遷をどのように考えるかは、今後分析した上で検討することになります。

しかし、今回の調査が実施できたことで「植遺跡」から続く7世紀以降の甲賀市内の古代の様相を知る手がかりを得ることができました。

また、古い製作手法の布目瓦の出土は、湖南と甲賀市内では初めてであり、滋賀県内で唯一空白地域であった白鳳寺院や古代の官衙の存在も考えられるようになるなど新しい課題も出てきました。



下川原遺跡 遺構配置図 (I区)

縮尺 1/250 を 70%に縮小



下川原遺跡 遺構配置図 (Ⅱ区)

縮尺 1/250 を 70%に縮小

